

キーノートセッション報告 -4

人工知能 (AI) との共生

～人間の仕事はどう変化していくのか?～

日 時:11/25 (土) 13:30-15:00

会 場:テレコムセンタービル 8階 会議室A

企画提供:科学技術振興機構 戦略研究推進部

〈パネリスト〉

安宅 和人 ヤフー株式会社 チーフストラテジーオフィサー

ドミニク・チェン 早稲田大学文学学術院 准教授

山口 高平 慶應義塾大学理工学部 教授

山本 勲 慶應義塾大学商学部 教授

〈モデレーター〉

川口 哲 科学技術振興機構 戦略研究推進部 調査役

■概 要

進化した人工知能 (AI) により、製造現場での生産性の向上や、高度な医療サービスの提供などが期待される一方で、人間の仕事が人工知能に取って代わられる「人工知能脅威論」まで噴出。マスコミ誌面を賑わして、人工知能に不安を感じている方も決して少なくはないでしょう。こうした現状を踏まえ、人工知能研究の第一線で活躍する方々を招いて開催された、トークセッション「人工知能 (AI) との共生～人間の仕事はどう変化していくのか?～」。パネリストそれぞれの研究報告をはじめ、「人間の仕事はどう変化するのか?」「AI時代を前に、もつべき『力』とは?」との問いかけに対して、活発な議論が繰り広げられました。

■内 容

どのような未来を創るのかを考えることが重要だ

人工知能の急速な発展を受けて、これまで人間が担ってきた多くの仕事が人工知能に取って代わられるのではないかと、まことしやかに論議されるようになってきました。そこで実施されたトークセッション「人工知能 (AI) との共生～人間の仕事はどう変化していくのか?～」は、実にタイムリーな企画と言えるでしょう。それだけに老若男女、多くの聴衆が詰め掛け、人工知能との共生がいかにか世間の耳目を集めているかを如実に示すことになりましたが、トークセッションは4人のパネリストによる研究紹介から始まりました。

まず、安宅和人氏は人間と人工知能の情報処理の違いを示しつつ、現在の人工知能を巡る論議が本質を捉えていないと指摘。ただし、産業革命級の変化の局面に立たされていることは



間違いなく、人間の仕事が奪われるかどうかといった議論に囚われる以前に「人工知能を使い倒して、どのような未来を創るのかを考えることが重要だ」と力説しました。

次に登壇した山口高平氏は、急速に普及する人工知能が特定用途に限って開発されているにも関わらず、現実よりも「人工知能を広く捉えられていて、それが誤解を生んでいる」と、主にマスコミで展開されている雑駁な議論に懸念を示した後、自身の研究グループで進めている、ロボットによる喫茶店の接客や小学校での授業支援の取り組みを報告しました。



なくなる仕事がある一方で、新たに生み出される仕事もある

さらに、データに基づき人工知能と人間の働き方について研究している山本勲氏は、過去に起こった新しい技術の普及と労働環境の変化に触れた上で、今後、人工知能の社会への浸透によって、人間の働き方がどのように変化していくかの予測を紹介しました。ただし、昨今の人工知能脅威論には問題点があることも指摘して、「仕事が奪われるという論議で、オックスフォード大学の報告が引用されることが多いのですが、この研究は問題点があります。確かに人工知能の普及で今ある仕事が代替されることはあるかもしれないが、新たに生み出される仕事について考慮していない」と語りました。



常識的に考えれば、新しい技術である人工知能が社会に実装されるなら、人工知能の開発者は不可欠でしょうし、人工知能を取り入れようとする民間企業を支援するコンサルタントも求められるはず。そうした新しく生じる仕事を無視して、漠然とした人工知能脅威論を鵜呑みにすることは、山本教授の目から見るととても危険な行為なのでしょう。

最後に登壇したドミニク・チェン氏は、情報化社会における人間の幸福の在り様 (ウェルビーイング) についての研究を概説した上で、「欧米で進められた研究の成果を、そのまま日本に持ち込めばいいのか」という疑問から、日本型のウェルビーイングとテクノロジーの関係を解き明かす研究へ進展し、その一環で開発した「心臓ピクニック」を紹介してくれました。

これは聴診器にスピーカーが接続されたデバイスで、利用者の胸に聴診器を当てると、スピーカーを通じて心臓の鼓動を聞

けるようになっていきます。このデバイスを使ったワークショップを実施しており、参加者から「生きていることを実感できた」、「相手の心臓の鼓動を聞いて、やさしい気持ちになった」といった感想が聞かれたといいます。機械を通じて心臓の鼓動を聞けるようにしただけにも関わらず、その行為から利用者が様々な意味を汲み取っている点は非常に興味深く、今後、人間とコンピュータの親和性を高めるための一ツールとして有効なのかもしれません。

人工知能を導入しなければ国際競争力は失われかねない

こうした個々のパネリストの研究紹介を受けて、モデレーターを務めた川口哲氏の進行により、本格的なパネルディスカッションに移行。まず川口氏が「仕事はどう変化するのか？」とのテーマを投げかけると、山口氏がコールセンターの仕事を例に挙げて、こう答えてくれました。

「人工知能の導入初期には、消費者からの問い合わせに応じて、どのように受け答えをすればいいのかをオペレータに指示して、仕事の効率が高められることが期待されますが、ゆくゆくは人工知能が電話対応をやるようになると、コールセンターのオペレータの仕事はなくなるかもしれません」

一口に人工知能を導入するといっても、初期においては人間の手助けをするものの、人工知能が高度化していけば、人間に取って代わる可能性が大きく、人工知能の影響を論じる上では、どのフェーズを指して論じているかが重要であると語りました。さらに川口氏は冒頭の研究紹介で山口氏が紹介した教師の代わりにするロボットに注目して、勉強を教えることも人工知能がやることになるのではないかと問うと、山口氏がこう答えました。

「ロボットに授業をさせてみると、最初は興味を持って授業に臨んでくれた生徒たちも、ロボットに慣れるに従って興味が失われてしまいます。一方、生徒の瞬きの回数から授業への集中度を測定することはできるようになっています。こうしたセンサー技術と組み合わせれば、ロボットにも授業を任せられるようになるかもしれません」

そうならば人工知能が教師の仕事の一端を受け持つことも十分にあり得るのでしょう。ただし、今ある技術だけで、すぐに教師の仕事が人工知能に取って代わられることはなさそうです。さらに安宅氏がこう付け加えました。

「電卓が登場した時のことを思い出していただければわかりやすいと思います。電卓が登場しているのに導入しなければ取り残されるだけ。国際競争力は失われてしまいます。それと同じことが起こっているのですから、人工知能を導入しないわけにはいきません」

つまり、どんな仕事なくなるかの心配をするよりも、人工知能はいかなる道具なのかを研究することこそ、今、私たちが求められていることなのだと、安宅氏は訴えました。

人間の本質への解像度を高めていくことが求められている

次いで「AI時代を前に、もつべき「力」とは？」に議題が移ります。川口氏が人工知能にはない「人間らしさ」が求められるのではないかと考えを示すと、これを受けて、安宅氏がこう続けました。

「人間の情報処理の本質である意味理解は人工知能にはできない。そのため、これからの時代、この意味理解を磨くことが重要になってくるはずですが、この能力を高める上で、伝聞はあまり有効ではない。例えば、包丁の研ぎ方を覚えるなら、本で学ぶよりも、実際に研いでみるほうがいい。何事も経験してやるのが大切で、生の体験が今まで以上に重要になる」

実体験を通じて何かを感じることは人間特有の知的行為だけに、AI時代にあっては重要視されるということなのでしょう。一方、「人間らしさ」の議論を受けて、チェン氏が異なる視点の問題を提起しました。

「ブラック企業のことが取り沙汰される世の中で、人間が人間を人間扱いしていない場面が見受けられます。機械に人間らしさを見つけようとするのではなく、私たち自身が人間の本質への理解を高めていくことが求められているのではないのでしょうか」

このように人工知能を巡る論議は実に深く、かつ多面的なものとなりました。そして、最後にモデレーターの川口氏が「人の意見に惑わされることなく、AIに真摯に向き合って、本質を理解し、どう学んで、どう使うかを考えることが求められているのだということが、全体のメッセージになったと思います」と締め括りました。

■ライターのひとつこと

社会を発展させるはずの人工知能が、人間の仕事を奪いかねないとの議論は、サイエンスライターとしては注目しており、今回のトークセッションを拝聴できたのは、非常に良い経験になりました。特にメディアで取り上げられることの多い「人工知能脅威論」の多くが、漠然とした恐怖からきており、正鵠を射ていないという批判は、日本の科学ジャーナリズムの非力さの指摘になっており、私自身、反省しなければならぬと感じました。とはいえ、人工知能が普及していけば、少なからぬ仕事人工知能に奪われるのは避けがたいでしょう。その点で、山本氏が言うように、人工知能の普及によって新しい仕事出現するはずだという指摘には大いに勇気づけられました。ただし、人工知能を使いこなせる者と、使いこなせない者との間に経済的な格差が生じる懸念があるのも否めぬ事実。だからこそ、人間が人間らしさを保つことが重要だという、チェン氏の問題提起は、人工知能が普及してもなお、多くの人が幸せでいられる社会を作っていくための大きな意味を持つてくのだと感じられました。

文責：齊藤勝司